

静岡平野のおいたち

柴 正博

私はこれまで本誌に、清水平野（第19号）と三保半島（第46号）のおいたちを掲載させていただきましたが、今回は静岡平野のおいたちについてです。静岡平野も三保半島や清水平野と同じで、今から1万5000年前のウルム氷期最盛期に海面が約100m低下していたときから、その後に海面が上昇して現在の海水準になっていく過程で形成された地形です。

みなさんもご存じのとおり、静岡平野は安倍川の大きな扇状地です。静岡平野の地形を詳しくみると、安倍川と藁科川の扇状地と旧河道の自然堤防にそつた微高地、扇状地と山地のあいだの低湿地、それと海岸ぞいの沿岸砂礫州と砂丘、そしてその沿岸砂礫州と扇状地の間の低湿地からなります（大塚、1996）。

今から1万5000年前のウルム氷期最盛期には、海水準が約100m低下していて、現在の大陸棚縁辺に当時の海岸がありました。そして、その後に海面が上昇していく過程で2度の海面停滞期があり、今から6000年前に縄文海進といわれる現在よりも数m海面が高かつた時期がありました。そして、その後に海面が低下して現在の海水準になりましたが、そのようなウルム氷期最盛期の海面が上下する過程で起こった河川と海岸での堆積作用によって地形の原型がつくられました。そしてその後、江戸時代以降の大規模な河川改修によって現在の地形になりました。

ウルム氷期最盛期の海水準は約100m低かつたことから、安倍川は現在の海岸線より10km以上も沖合の現在の大陸棚縁辺にその河口がありました。その時、安倍川と藁科川は現在の平野の地下約100m付近に深い浸食谷をつくっていました（図1）。

そして、今から1万2000年前からの海面上昇によって、海水が現在の平野の中に浸入し、今から約6000年前の縄文海進の時には、現在の山地の麓は海岸線となり、谷津山や八幡山、有東山、有度丘陵は島となっていて、静岡平野全体が松島湾や志摩半島のようなリアス式海岸の入り江のようになっていました。

縄文海進のあとに海面はだんだんと低下し

ていき、安倍川と藁科川、また長尾川や有度丘陵を含む周辺山地からの小河川の河口に扇状地が発達しました。そのとき、安倍川の河口は賤機山の南端、現在の駿府城公園付近にあり、そこから扇状地をもとに東側に発達させていました。藁科川の河口は高草山山地の東南麓にあり、南側に扇状地を広げて東側にのびる砂礫州を形成させました。清水平野ではその時、その東側を区切る南側にのびる砂州が形成されました。

扇状地群と山地および海側の砂礫州のあいだには低湿地や潟湖（ラグーン）が形成され、そこには腐食性の粘土が厚く堆積しました。そして、安倍川の扇状地は大きく広がり、南から南東側、さらに有度丘陵の北側の低湿地に、その分流が自然堤防をつくりながら砂礫州とのあいだの潟湖や低湿地を埋積させていました。

今から約2000年前には、安倍川扇状地の自然堤防の上の微高地には、有東や登呂の遺跡で知られる弥生時代の集落が形成されて、それら付近の低湿地を水田にした耕作があこなわれるようになりました。その自然堤防は、石田街道のような現在南北にのびる道路になっているところです。

その後、江戸時代のはじめ1604年（慶長9年）に、徳川家康は駿府城の西側に島津氏に堤防（薩摩土手）を築かせました。それは、安倍川をその西を流れる藁科川と合流させて、南に流れる直線的な流路に変えて海に直結させるためでした。それにより、駿府城の南側は洪水の危機から脱して城下町が整備され、扇状地の南部は安定した耕作地となりました。

その江戸時代初期の安倍川の南流改修と巴川の河口部の河道改修などの結果、清水平野の北部の湿地は干上がり、新田が広く開発され、現在のような清水平野が誕生しました。徳川家康は、江戸に幕府を開いて、それまでの他の領地を奪って領地を増やす戦国時代を終結させて、各大名が戦いによって領地を増やすのではなく、領地の河川の治水工事によりそれぞれの領地の中で耕作地や町が整備で

きるようさせました。それは、それまでの時代と比べて生産性を飛躍的に高め、今でいうノベーションに相当する国家的施策でした。それにより徳川氏による江戸幕府は約250年間も維持され、現在の日本各地の海岸平野

にある大都市の発展の基礎が築かれました。

文献：大塚謙一（1998）静岡平野を巡って。
静岡地学会編：駿遠豆大地見てあるき、104-115.

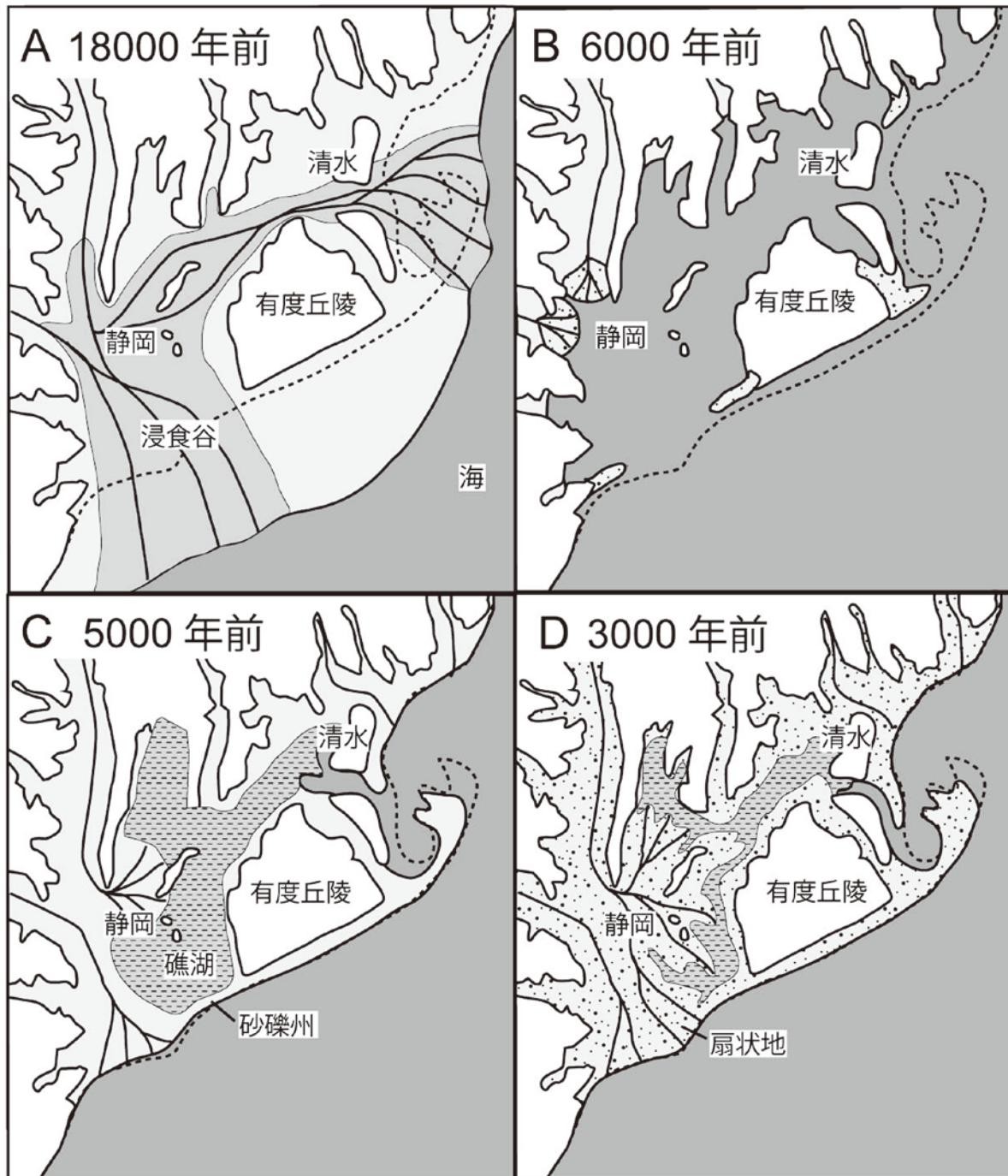


図1 静岡平野のおいたち（大塚、1996を一部修正）。A: 低海水準の大溪谷時代, B: 縄文海進でリアス式海岸時代, C: 砂礫州と礁湖(ラグーン)の時代, D: 扇状地と砂礫州発達の時代(現在に至る)。